

（報道）

・『中央新聞』 昭和六年四月（不誌）日 （9）

期待される春陽会挿絵部

大津城 以知路

春の画壇は日本美術院の試作展以来、幾多の会が開かれたが、浮世絵の如きは別として、新作展覧会に於ては残念ながらこれといふ収穫のなかつた事を残念に思ふが、一体から云つてこれ等のものは、多く秋の帝展、院展等に対する試作展に類するもので、塾展とも見るべきものが多いのであるから、これに期待をかけるのは元来が無理なのであるけれども、この中にあつて、春陽会のみは名の如く春を会期とする画壇最高レベルの存在であつて、秋の二科会展に対して、立派な鼎立的存在であることは何人もこれを認めるところである。

もちろん、これは春陽会の構成主体たる洋画を以てしての話であるが、更に我々は、その春陽会に別の意味から大いなる期待を抱くものなのである。

それは、春陽会に於ける日本画運動であつて、主としてその挿絵室に於て見出す所のものである。

従来の春陽会に於けるこの種日本画は参考出品といふ程度に止まるものであつたのであるが、本年からはそれが特に一室を設け挿絵部として見え

る事になつたのであつて、この事自身が、既に春陽会がこの方面に如何に重きを置いて来たかを語るものであつて、それだけにここに期待する事が出来るのである。

既に今日に於ては日本画は日本画として、その伝統にのみ生きてゆけるものではない。

欧州の画壇に於て東洋趣味がしきりに用ひられるのと同様に、日本画に於てもまた、その東洋精神を失ふ事の不可なるはもちろんであるけれども、これを失はない範圍に於て彼等の長所を採り、これを応用するのは当然である。この意味に於て、今後の日本画は少くとも洋画の研究を離れては成し得ないのであり、だから、現在に於て、新しい日本画の発生といふ事になると、どうしても洋画系統から出発した日本画家に期待するより他ないのである。

この意味、この観方よりする時には春陽会の如きは最も期待されるべきものであつて、春陽会の今後の日本画運動は注目に値すると思ふ。

*春陽会「挿絵室」 昭和二年、第五回展から「挿絵室」を特設。

*以下、展覧会目録から

・第五回展(昭和二年) 「挿絵室」(第五室)

木村荘八 《挿絵画稿類》

小杉未醒 《奥の細道帖(挿入未完)》

小穴隆一 《装幀》A、B

河野通勢 《或るお伽噺の挿絵》

石井鶴三 《大菩薩峠 挿絵》1〜10/他二件

・第六回展(昭和三年) 「版画室」新設(第五室) / 萬鉄五郎遺作室特

設(Y室) —— 「挿絵室」特設せず。

石井鶴三 《高野聖》一〜四、《俊寛》、《春泥》、《巖八と桂馬之助》一〜

三

木村荘八 《蛇柳(歌舞伎十八番の内)》、《練三番》、《紙治》着色と木

版、《挿絵画稿》

小杉未醒 《羅摩物語》、《漁樵閑話》、《奥の細道 十五題》

・第七回展(昭和四年) 「挿絵室」(第十一室)

中川一政 《歳晚帖》 忙中閑人、旅の宿、川国境を為す、仲秋初月、修

善寺桂川、山間浅春、独異郷に在り、漁村雨後、山村春宵、窓前他国

山、山田獵人来る、黒部溪谷鐘釣

小杉未醒 《古事記》 稗田阿禮、泉津平坂、天岩戸、建御雷と建御名方

田中咄哉 《十和田湖》、《奥入瀬》

足立源一郎 《鳴門了三挿絵》一、《鳴門了三挿絵》二

石井鶴三 《破戒挿絵》一〜三、《溪流》、《溪谷》

・第八回展(昭和五年) 「挿絵室」(第十一室)

小杉放庵 《後赤壁図巻》、《試馬》、《養魚》、《椿》、《秋水仙》

石井鶴三 《四十八人目》挿絵、《吉良家の人々》挿絵 一〜六

森田恒友 《春郊写生》一、二、《或る山景》

*

長谷川潔 版画十四点展示 《アネモン》《野の花》《アネモンと草花》

《シレーン》《薔薇》《小鳥とアクワリウム》《小さな金魚鉢》《田舎家

と雲》《丘上古村》《メラルグ古村》《ノエルのサボウ》《キャネの古水

車》《ムードンの煙突》《バースザルブの古村》

「挿絵室」(第十二室)

中川一政 《煙霞帖》 一(煙霞如是好)、二(山中春望)、三(時春雨

寒)、四(偶海村月)、五(我愛日本國)、六(海村春望)、七(春自遠

方来)、八(能解閑行有幾人)、九(山間日永)、十(漁樵同時)

木村荘八 《唐人お吉挿絵原画》

田中咄哉 《思出五景》

阿部みどり 《坂道のある風景》

足立源一郎 《罌粟はなぜ紅い》(一)〜(六)

・第九回展(昭和六年) 「挿絵室」(第十一室)

中川一政 《煙霞帖 追補》(前山薇也肥)、(二月入斧之時)、(波浮港)、

木村荘八 《夜楽》

小杉放庵 《土佐風景》一、二、《蒙古馬》、《娘》、《寒山子》

今関啓司 《山中雨後》(水墨)三枚、《湖畔》(水墨)、《遊湖》(水墨)、

石井鶴三 《午睡》、《男》、《少女》

足立源一郎《山人間さしゑ》十点

中川一政 《葉桜》(岸田国士 さしゑ)、《屋上庭園》(岸田国士 さしゑ)、

《頼母しき求縁》(岸田国士 さしゑ)

石井鶴三 《南国太平記 さしゑ》十五点

碓伊之助 《夜ふけの客人》二点、《蒼ざめた太陽》三点

「挿絵室」(第十二室)

木村荘八 《祖国は何処へ》(時事新報 挿画)、《ラグーザお玉》(東京

日日新報 挿画)、《女獣心理》(都新聞 挿画)

倉田白羊 《都新聞 挿画》五点

・第十回展(昭和七年) *挿絵展示(第六室)

中川一政 《閑行帖》一(夜半春雨過)、二(誰知山中春)、三(扇画漁

樵)、四(身賤知農事)、五(山従人面起)、六(秋風何処至)、七(圓

窓秋山)、八(能解閑行有幾人)

森田恒友 《一村写生帖》画稿の内一〜五

小山敬三 《明日を逐うて》(東京朝日新聞所載 さしゑ)二点、《日曜

静観》さしゑ

・第十一回展(昭和八年) *挿絵展示(第十二室)

石井鶴三 《国定忠治》挿画 八点

中川一政 《人生劇場》(都新聞原稿)十点

小林徳三郎 《浅草の娘達》挿画(都新聞原稿)

倉田白羊 《狼》挿画(都新聞原稿)

*挿絵展示(第十三室)

木村荘八 《東京風景》挿画 三十八点、《女獣心理》(都新聞原稿)、

《白い蛇赤い蛇》(都新聞原稿)、《新東京風景》(都新聞原稿)、《東

京新景》(経済往来原稿)

・第十二回展(昭和九年) *挿絵展示(第十一室)

木村荘八 《小説霧笛の場面》(一)〜(八)、《デユブラの随筆 挿絵》

(一)(二)

・第十三回展(昭和十年) *挿絵展示(第三室)

木村荘八 《新宿駅》(東京風景 第五)稿、《新宿駅》(東京風景 第五)習作

習作

・第十四回展(昭和十一年) *挿絵展示(第六室)

石井鶴三 《青鴉》挿絵 六枚、《東海美女傳》挿絵草稿 六枚

中川一政 《人生劇場》挿絵 十枚

・第十五回展(昭和十二年) *挿絵展示なし

・第十六回展(昭和十三年) *挿絵展示(第六室)

木村荘八 《墨東綺譚》挿絵

石井鶴三 《宮本武蔵》挿絵、《去る来る日》挿絵

・第十七回展(昭和十四年)以降 *挿絵展示なし

1931 ○ April

昭和6年（1931年）4月 報道「期待される春陽会挿絵部」（中央新聞）